

木曾川

INDEX.....

ふるさとの街・探訪記《笠松町》

悠久なる木曾川の流れとともに

AREA REPORT

笠松陣屋、歴代代官・郡代の治水行政

気ままにJOURNEY

木曾の流れのように、煌めいて...
笠松は今、爛漫の春景色

歴史ドキュメント

上流改修の石碑を訪ねて

TALK&TALK

木曾川上流改修を省みる

民話の小箱

猿尾のつつみ

木曾川文庫は治水の資料館。

水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、

これからの治水を皆様とともに考えていきたいと思ひます。

今回は木曾川の舟運の拠点として

発展を遂げた笠松町を特集。

大正改修最終回は、流域各地の石碑をめぐり

改修の成果を顕彰します。



悠久なる木曾川の流れとともに

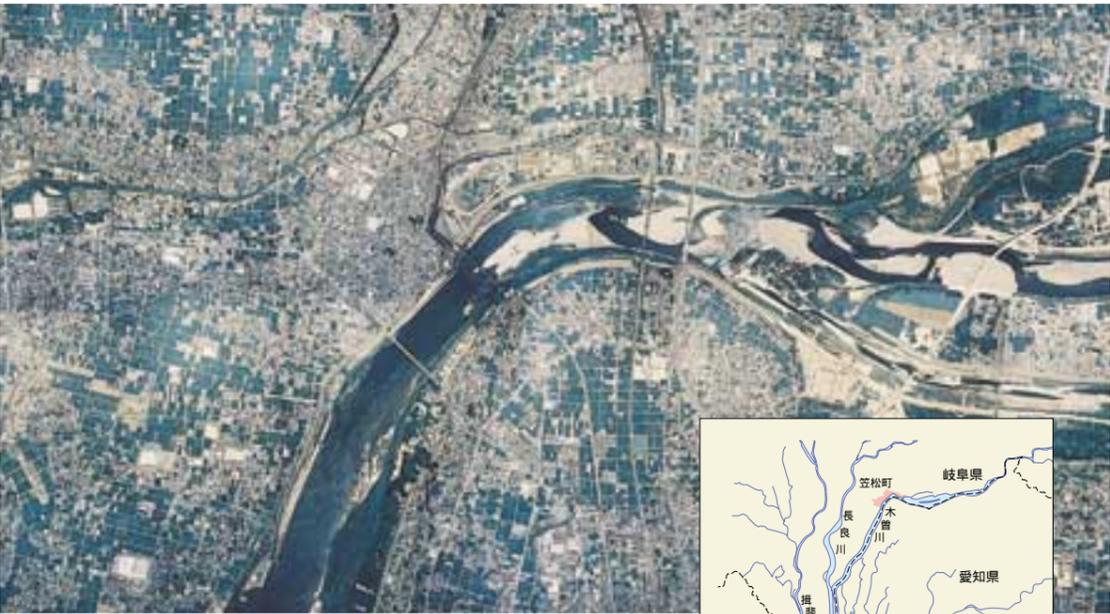
木曾川の度重なる氾濫にあいながらも、河湊の町、美濃編の町、そして美濃の政治拠点として、歴史を重ねてきた笠松町。そんな自然や歴史、文化に恵まれた笠松町は、「木曾の清流にいだかれた個性豊かな生活文化都市」をめざして、活気ある町づくりを進めています。

笠松町のあらまし



岐阜県の南部に位置する笠松町は、木曾川右岸に沿って帯状に広がる低地です。西には養老山地と伊吹山を遠望し、北には金華山と各務原台地を一望。海拔10m前後で面積は10km²。北部の境川、南部の木曾川にはさまれた、かつての輪中地帯です。特に南西部にあたる田代・長池・北及・門間の松枝輪中(旧田代輪中地帯)は、古くから木曾川の洪水に苦しめられた水害常習地帯でもありました。

笠松町には大きく分けて、五つの集落形成の過程がみられます。集村・堤防集落・低台地集落・渡頭集落・街村がそれです。集村とは、集落の一形態で、人家が一か所にかたまって形成された集落です。堤防集落は木曾川本堤の改修とともに集村であったものが、堤防の中腹に移転・形成された低地特有の集落です。堤内側は湛水被害や地場の崩れを防ぐため竹林を植えるのが一



笠松町の航空写真

する特権を与えられていた家柄。木曾川の水の深淺を心得ていた野々垣だからこそ、こうした大役を果たすことができたのでしよう。この戦功により、江戸時代に野々垣は、尾張藩の川並奉行に任命され、不動の地位を確立したのでした。

美濃の政治拠点・笠松陣屋

江戸時代の笠松地域の支配機構は、大部分が幕府直轄領と旗本領で、円城寺と栗木が尾張藩領に、また北及が一時加納藩領になったことを除いてあまり変動がみられませんでした。

笠松に陣屋が置かれたのは、寛文二年(一六六二)のこと。以来、代官・郡代二代が笠松陣屋で幕府直轄領の支配にあたりました。歴代の代官・郡代は、尾張藩領・大垣藩領・加納藩領を除いた美濃、時には一国の治水行政をも管轄し、治水行政の拠点としての役割をなしていました。また笠松陣屋と国内に所領を有する大名・旗本の藩庁・陣屋などの往来もあり、笠松は重要な政治の中心地となりました。

笠松の発展は河湊とともに

笠松から桑名の河湊まで十里。笠松は木曾川舟運の中継地として、発展を遂げました。桑名・四日市・名古屋などから、海産物・塩などの商品が上流の黒瀬(現八百津町)、兼山・太田へ。上流からは年貢米・材木・薪炭などが川下げされました。加納町・岐阜町への商品も笠松で陸揚げされて、ここから駄走されました。また、舟運の発展とともに街道も充実。岐阜街道に沿って問屋や民家が南北に連なっており、枝分れ道は渡船場



円城寺役所跡(昭和20年)

般的で、木曾川右岸に沿って、円城寺・中野・無動寺・江川・米野の集落があります。低台地集落とは、木曾川の堆積土砂によって形成された微高地にできた集落のこと。人々は少しでも高い土地を求めて集落を形成、周囲に排水のための小川を流したり、低台地の一部に土堤を築き竹林を植えたりして、悪水の浸入を防いでいました。このような集落は、門間・長池等の一部にみられます。

渡頭集落とは渡船場や河湊にできた集落のこと。江戸時代、重要な河湊として栄えた笠松には、宿屋・料理屋をはじめ、船頭の住居を含めた集落を形成していました。

街村とは街道に沿って人家が密集する集落のこと。笠松がいつの時代に街村化したかは明確ではありませんが、江戸初期、陣屋が笠松に置かれ、さらに街道や渡船場が整備されたことで、街村の形態を充実、繁栄の道のりを歩んだと考えられています。

ありし日を伝える数々の遺跡

往古の笠松を偲ぶ遺跡として、藤掛中州水没遺跡と東流庵寺跡があります。

古代の木曾川は現在よりも北の位置を流れておりましたが、藤掛遺跡は流路の変動とともに河床へ。昭和四六年、田代の藤掛地先で、木曾川の元の中州、即ち、現在の河床から多くの土器が発掘されました。出土品は縄文時代から江戸時代に至る、須恵器、山茶碗、木造仏など数百点。数千年以上の歴史を物語る複合遺跡といえます。

また昭和三年には、田代・長池地内から二重孔式の塔中礎石や土器・瓦類が発見されました。これが東流庵寺跡・通称蓮台寺と呼ばれているもので、発掘された礎石や瓦がら、この地は、白鳳後期、金蓋堂、講堂、それらを囲む中門が配された壮大な寺院が存在していたと推定されています。

こうした寺院建立は、相心の財力をもった豪族でなければできなかったこと。したがっ

笠松は、明治以降、混乱の時期を迎えます。明治四年、廢藩置縣の施行により笠松県(同年十一月には岐阜県)が一旦は置かれたものの、明治六年には岐阜県庁が岐阜町に移転以後は純粹な商工業地域に。明治四年の濃尾大震災では家屋の八割が倒壊、一割が全焼し、明治一九年の大水害でも大きな被害を受けています。また、明治二年、東海道本線が開通しましたが、笠松には停車駅が作られませんでした。

しかし、大正一五年四月に岐阜第二工業学校(現県立岐阜工業高等学校)が開校し、県下の工業教育の振興に大きく寄与しました。

昭和一〇年には新岐阜と押切町(現名古屋市)間に名鉄の直通電車が開通。同一年、木曾川橋の鉄橋化など、これらの交通網の整備に伴って、笠松町に人口集中現象が起きます。そんな中、昭和五年には笠松競馬場、同一七年には県立高等工業学校(現岐阜大学工学部)が設立されるなど、町は活性化の一途をたどることになりました。さらに、第一次世界大戦の戦災が比較的軽少であった笠松町は、戦後、織物の町として再スタート。しかし繊維産業の衰退は、この町の地場産業に大きな影響を与えています。このような状況下、自動車の著しい普及により、笠松町にも名古屋市及び岐阜市のヘッドタウン化の波が及んでいます。

そして現在、「木曾の清流にいだかれた個性豊かな生活文化都市」をめざして多彩なプロジェクトが進行中。公共下水道整備事業や木曾川リバーサイド整備事業、生涯学習システムの確立な



木曾の流れなどの自然環境を生かすトンボ池

て、蓮台寺建立の豪族は郡司クラスの地方豪族であり、木曾川本流が現在よりも北流していた白鳳時代、この一帯が尾張國栗原郡に属していたことからみても、律令國家を支える有力豪族であったといえます。

中世封建社会の末期から近世にかけては、蓮台城があったといわれています。城主の森家は美濃守護土岐家に仕え、その末裔は、本能寺の変で織田信長とともに戦死した、森蘭丸。蓮台城は田代の西方、このあたりにはかつて馬場・番匠などの小字名が記録されており、尾張に通ずる街道沿いに築かれていたといわれています。

国境を変えた天正の大洪水

天正一四年(一五八六)の大洪水は、木曾川の流路を一変させました。以前、現在の境川を流れていた木曾川は、栗原・中島両郡を突破する形で河道を北西から南西へ変更。上中屋(現各務原市)・無動寺・栗木(一部笠松町)などは、洪水によって村を二分され、従来、尾張國栗原郡に属していたこれらの集落は、美濃國羽栗郡に編入されました。尾張から美濃へ。こうした国境変更は、天正一七・一八(一五八九・九〇)の兩年、豊臣秀吉によって実施された天正検地によって決定されたと考えられています。

米野の戦いと野々垣源兵衛

慶長五年(一六〇〇)八月二日・二日の両日、笠松地域は戦火にみまわれました。関ヶ原の合戦の前哨戦である米野の戦いがそれです。池田輝政率いる東軍が、木曾川を渡って米野へ上陸し、それを迎える西軍を破り、その翌日、西軍・織田秀信の本拠岐阜城を総攻撃し落城させました。この戦いが誘因となり、東軍が関ヶ原での勝利をおさめたともいわれています。

米野の戦いの立役者は、東軍が木曾川を渡河するための水先案内人、野々垣源兵衛です。円城寺に本拠を持つ土豪野々垣は、織田信長の時代から木曾川を下る筏を支配

笠松町文化財めぐりガイド
笠松町文化財保護審議会
ふるさと笠松
笠松町
笠松町要覧
笠松町
角川日本地名大辞典24岐阜県・角川書店

煙撃堤の恩人・酒井七右衛門

堤防の築造は幕府の裁可の上で行われるもの。しかし、輪中地帯のように上流と下流の利害が対立する地域では、容易に裁可は下されません。笠松地域でも同様で、境川の氾濫に苦しむ松枝輪中の農民は、天明四年(一七八四)、代表四人が代官所へ堤防築造を嘆願し、投獄され獄死しています。しかし、何としても水を食い止めたい農民は、畑地のさらなる盛土を多年に渡って繰り返す。煙と煙を盛土でつないだ、煙撃堤、なるある意味で合法的で実質的な小土堤を完成させました。四人の犠牲者を出したほぼ三年後、文化四年(一八〇七)のことでした。この煙撃堤の存在を知りながら黙認したのが尾張藩の代官酒井七右衛門です。文化一〇年(一八一三)、幕府の喚問を受けた酒井代官は、「一方は堤防を築き、一方は氾濫勝手次第なるを許さんや」と(松枝輪中だけを水害で苦しませてはならない)と証言。その主張を幕府は認め、賞しています。

北門間に残される煙撃堤跡は今では県道に。酒井代官と四人の犠牲者の墓は、中門間の慈眼寺に残されています。



酒井代官の墓

笠松陣屋 歴代代官・郡代の治水行政

江戸時代、国家の財源である農業収入の安定を図るために、治水工事は重要な課題でした。

木曾川水系の治水行政の拠点は、笠松陣屋。初代岡田将監善同をはじめ、歴代の代官・郡代は様々な治水工事を実施。その変遷は、近世における治水工法の成長の姿です。

笠松陣屋・その序章

関ヶ原の合戦の後、美濃は譜代・外様大名と旗本の所領、幕府直轄領に細かく分割され、美濃と尾張の国境にあたる笠松には、交通軍事の要所として、美濃代官・郡代の陣屋が置かれました。この笠松陣屋は、寛文二年（一六六二）、幕領を守り、美濃の治水行政を司るために設置されたものです。

笠松陣屋には前史があります。慶安三年（一六五〇）九月の洪水被害の復旧工事を指揮するために、時の美濃国奉行岡田将監善政（代官の役名は寛文以降）がこの笠松に休憩所を置いたのです。休憩所とはいったものの、仮にも美濃国奉行の屋敷であり、家来、丁事人夫、さらには丁事物資が集散する所でしたから、立派な治水拠点だったのでしよう。ともあれ、この時が笠松に幕府の機関を置いた最初です。

この休憩所を陣屋と定めたのが、郡代名取半左衛門長知です。美濃陣屋であった徳野陣屋（現可児市）の門・玄關・書院などを移築し、美濃の政治及び治水拠点を構えたのでした。



岡田将監陣屋址（岐阜県揖斐郡揖斐川町三輪北町）

岡田将監父子が確立した将監定法

寛永八年（一六三二）、父善同の職を継いで美濃国奉行となった善政は、洪水の復旧工事に力を注ぎました。丁事は巨額な費用と莫大な労力を要するもので、善政は幕領・私領の隔てなく、国役普請として水行奉行の旗本・高木氏とともに丁事を進めさせました。国役普請とは、通常、幕領が集中する淀川水系や木曾川水系の治水事で、領域を越えて大名・武士に普請役を課する制度です。とはいえ、徴発される人足は、村々に一定の割合で課せられるのであり、結局は農民が負担すること。こうした負担を軽減するために、夫役・実人足役の代銀制などが採用され、それが美濃独自の方法であったため、「濃州国法」と呼ばれるようになりました。この治水制度は将監親子が一代に渡って確

美濃郡代歴任表

名	前	在職期間
初代	岡田将監善同	慶長17(1612) 寛永8(1631)
2代	岡田将監善政	寛永8(1631) 万治3(1660)
3代	名取半左衛門長知	万治3(1660) 寛文7(1667)
4代	杉田九郎兵衛直昌	寛文8(1668) 天和3(1683)
5代	甲斐庄四郎左衛門正之	天和3(1683) 貞享2(1685)
6代	岩手藤左衛門信吉	貞享2(1685) 元禄12(1699)
7代	辻六郎左衛門守参	元禄12(1699) 享保3(1718)
8代	辻 基太郎守雄	享保3(1718) 享保20(1735)
9代	井沢弥惣兵衛為永	享保20(1735) 元文2(1737)
10代	滝川小右衛門貞幸	元文2(1737) 延享3(1746)
11代	青木次郎九郎安清	延享3(1746) 宝暦8(1758)
12代	千種清右衛門直豊	宝暦8(1758) 天明3(1766)
13代	千種六郎右衛門惟忠	天明3(1766) 天明6(1786)
14代	千種鉄十郎	天明6(1786) 天明8(1788)
15代	辻 六郎左衛門富守	天明8(1788) 寛政3(1791)
16代	鈴木門三郎正勝	寛政3(1791) 寛政11(1799)
17代	辻 基太郎守貞	寛政11(1799) 文化2(1805)
18代	三河口太忠	文化3(1806) 文化7(1810)
19代	滝川小右衛門惟一	文化7(1810) 文化11(1814)
20代	滝下内匠堅徳	文化11(1814) 文化11(1828)
21代	野田弁吉	文政12(1829) 天保6(1835)
22代	柴田善之丞	天保7(1836) 嘉永4(1851)
23代	岩田謙三郎	嘉永4(1851) 慶応3(1867)
24代	屋代増之助	慶応3(1867) 慶応4(1868)

（岐阜県史・史料編・近世五、pp.189～228による）

元禄・宝永の治水を実施した辻郡代

元禄二年（一六九九）、笠松陣屋に着任した辻六郎左衛門守参は、初代の美濃郡代であるといわれています。この時期まで、代官と郡代という職名は幕府職制上、確定していなかったからです。しかも、美濃へ幕府勅定奉行直属の郡代が派遣されるようになったのも最初のこと。辻郡代は、八代将軍吉宗に抜擢され勘定方に加えられた精鋭の人物でした。

元禄二年から享保元年（一七一八）までの郡代着任中、辻郡代が手がけた治水工事は多く、特筆すべきは、元禄二年（一七〇三）宝永二年（一七〇五）の取払普請です。

この両度に渡る取払普請は、辻の構想では、一貫した治水工事に他なりません。元禄五年（一七〇二）辻は、高木水行奉行などを派遣して美濃国内の諸河川を調査させ、その結果に基づいて立案した治水計画を幕府に提出し、承認を得ています。

辻の立案した計画にみる工事実施区域は、木曾三川の中流以下全域に渡るもので、その広さにおいては、

普請場所への距離	高	100石あたりの人足数	人足役日数
堤所ならびに1里内	2人		25日
堤所へ1里余	2人		24日
堤所へ2～3里	2人		21日
堤所へ3里以上	2人		18日

を可能にしたことも見逃せません。

元禄の取払普請は、元禄一六年六月、揖斐川下流の桑名・長島両藩の村々で実施。宝永の大取払は宝永元年（一七〇四）着手され、翌年の二月に完了。その規模の大きさと効果の点で、後世に語り継がれることになりました。

この両度の取払普請は、この時期の治水工事の到達点であり、被害を軽減することはできました。しかしその一〇年後、辻・高木らが改めて幕府に取払普請を願い出ていることからみても、抜本的な解決にならなかったことは、紛れもない事実です。

とはいえ、わが国の地理的条件に即して、河水を速やかに海に流下させるために、流水の障害物を除去し、河道の直線化を図るといふ、辻の構想と意図は、わが国の治水策に一つの方向を与えたといえます。

辻郡代は、享保改革にあたって抜擢され、勘定吟味役に転出しています。

三川分流を立案した井沢弥惣兵衛為永

九代郡代に着任した井沢弥惣兵衛為永は、紀州流治水の大家です。享保改革の中心政策ともいへば、新田開発の推進役でもありました。

もと紀州藩士でもあった井沢は、將軍吉宗に抜擢され勘定方に入り、普請方に属しました。井沢の指導した事業は、武蔵国の見沼の干拓とそれに伴う水路の開削や同国の中川開削や多摩川改修工事など、その後、享保一〇年（一七三五）から、元文二年（一七二七）まで、井沢は勘定方吟味役のまま美濃郡代を兼任しています。

この間の井沢の動静自体が、享保期における幕政の推移を物語っているといっても過言ではありません。井沢のもとで大規模な新田開発事業が、大河川流域の治水・用水工事を伴いながら展開され、それによって幕府財政の基盤が拡大強化されたのです。

幕領を中心としたそれら一連の事業は、大名・旗本にも累を及ぼすことが避けられず、

その問題の解決を幕府の利益を最優先させる方法として、前述した国役普請制度が制定されたことかできます。そして、幕府の新田開発事業が一段落した享保一七年（一七三二）、西国に大被害をもたらした蝗災を理由に国役普請は中止されます。この背景には、もはや国役普請を不必要化していた政策上の理由を考えることができます。

その後の井沢の新たな任務は、木曾川水系の治水問題解決だったのでしょう。享保一〇年八月二日、美濃郡代を命ぜられた井沢は以後二月まで五か月間しか笠松には滞在しませんでした。それでも美濃在任中、木曾三川をはじめ支派川を巡視して綿密な三川分流治水計画を立案し、これを幕府に建言したのです。しかしこの時、井沢は老齢であり、元文二年九月美濃郡代を辞した翌年三月、死去しています。享年は八五歳でした。

井沢の立案した三川分流計画にのっとりての治水工事は、延享四年（一七四七）に二本松藩主丹羽若狭守高庸に命ぜられた御手伝普請が最初でした。この普請は幕府の木曾三川の治水策が、洪水原因への対処、つまり、下流部で合流する木曾三川を分流することで、洪水の原因となるものを根絶する、という意味で注目されるものでした。

しかし、延享の御手伝普請でも洪水は解決せず、宝暦四年（一七五四）、ついに井沢の三川分流計画に基づいた宝暦治水が実施されました。この時の郡代は、二代青木次郎九郎安清。青木は、二之手と呼ばれる伊勢国桑名一帯の丁事を指揮しています。

笠松陣屋の終焉

こうした数々の治水工事の拠点となった笠松陣屋も時代の流れには逆らえず、慶応四年（一八六八）、二百年に及ぶ歴史に終止符を打ちました。

この笠松陣屋は笠松臈片（後岐阜臈片）と名称を変更、明治六年に臈片が岐阜町（現岐阜市町町）に移転するまでは岐阜臈片の中心地

でした。しかし、以後の大火で焼失し、陣屋跡は笠松の大切な史跡として整備され、小公園となっています。

参考文献
『ふるさと笠松』笠松町
『笠松町勢要覧』笠松町

木曾川リバーサイド整備事業

笠松町の「第三次総合計画」では、暴幹プロジェクトの一つとして、「木曾川リバーサイド整備構想」を位置づけています。これは、国営木曾三川公園計画の事業計画に示された羽鳥・笠松・谷務原を結ぶ、河川敷を利用した自転車歩行者用道路と笠松町から川島町まで定着している世界淡水魚園（仮称・平成十一年一部開園予定）に直接連絡する自転車歩行者用道路を軸として、笠松町内の四面で面的な整備を行うものです。

緑地公園と広大な水面を有する北及地区、笠松港公園と歴史的風情あふれる港町地区、開放的な景観が魅力な円城寺地区、そしてトンボ天国に代表される自然豊かな江川・米野地区の四地区であり、人との共生を図り個性あふれる地域づくりをめざしています。そして、面的整備を有機的に結びつけるためにも、自転車歩行者用道路の早急な整備が求められています。



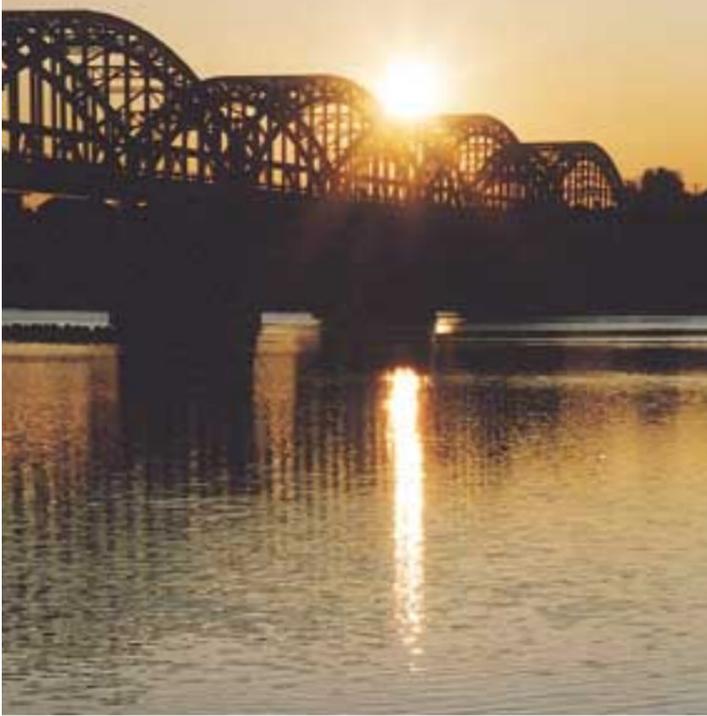
リバーサイド事業が進む河川敷



辻六郎左衛門の墓碑(上本町 法伝寺境内)



笠松陣屋跡



木曾の流れのように、煌めいて... 笠松は今、爛漫の春景色

と赤い和傘と松の植木が出迎えてくれました。この「傘」と「松」こそ、町のシンボル「笠」松。地名を風景に取り込んでしまう遊び心は、町を愛する人々の心のあらわれなのでしょう。河湊として、美濃織の町として陣屋の町として、歴史を重ねた笠松。文化と歴史が息づく町で、どんな旅のスケッチが描けるのでしょうか。カメラひとつを道連れに笠松をめくってみましょう。

芭蕉踊りの発祥の地、おふじの宮

木曾川の水面を埋める桜花。川風に揺られるヨシハラ。木曾の流れとともに生き、ともに歩いた笠松は、歴史と文化の交差点。そんな昔日の光景を、川灯台は、今なお、浮かびあがらせている。

名鉄本線・新名古屋駅から新岐阜行き急行に乗って約五分、淡い春の陽差しを浴びて煙めく木曾川を越えるころ、列車は笠松駅に到着。プラットホームに降り立つ



笠松駅の「松」

笠松駅から笠松競馬場を越えて東へ約1km、円城寺集落には通称「おふじの宮」と呼ばれている円城寺富士神社があります。おふじの宮は、今に伝わる雨乞い踊り「芭蕉踊り」の発祥の地といわれています。日本を代表する大河・木曾川を目前に控えながらも用水路をもたぬゆえ、かんばつに苦しんだ人々、彼らの悲痛なまでの叫びが、こうした祈りの踊りを生み出したのでしよう。おふじの宮にはこんな伝説が残されています。

時に嘉永六年（一八五三）のこと。田植えを終えてふた月もたつとについに、毎日の晴天続き、稲は細く巻いてちぢみ、田はひび割れができる始末です。困り果てた人々は、神明神社に火をたいて幾晩も祈りを捧げました。しかし、幾日たっても雨は降らず、太陽はじりじりと照りつけるばかり。そんな時、真っ暗なお社の裏手から、白い着物を着た老婆が現れ、「ついでに、私はおふじの宮へ参り、雨乞いは殿前の手力様にお参りして、お札を受けられよ。さすれば、きっと雨は降るさう。」

「これはよい考えじゃ。せつかくだから、太鼓も鉦も笛も鳴らして、盛大にやろ。」こう決めた人々は、青竹を切り出して割り、白い御幣を上から下まで張りつけました。その御幣はそれはそれは美しく、まるで白い芭蕉の葉のようでした。「これならきっと、手力様の神様もお喜びになるさう。」

意気のいい若者たちは、この白い芭蕉を背中にくりつけ、太鼓や笛を打ち鳴らし、右や左に飛びはねながら、踊り続けました。東西しすまれ歌あはれ。あまりの日照りにながしに神明神社への雨乞い。大明神のご生にて夕立雨でも流れれば、あぜ八分に苗流れるやがて歌も加わって、夜が更けるのも忘れ、村人はますます激しく踊り続けたのでした。すると、ポツ、ポツ、ポツ、と雨が降り出しました。たちまち、雨は勢いを増し、男衆も女衆も肩を抱きあい、手を取りあって喜びました。

「これはきっと、手力様の神様が、おふじという老婆に姿を変えて、村を救ってくれたにちがいない。」実りを迎えた村人は、富士神社を造って、おふじさまをお祀りし、日照りで困ると手力様様にお参りするのが習わしとなりました。人々の素朴な願いから生まれたこの芭蕉踊りは、その後、笠松を代表する民俗芸能に。願をかける「掛け踊り」とお札の「ひねり踊り」が演じられており、毎年八月二日、秋葉神社などに奉納されています。この芭蕉踊りは、岐阜県の重要無形民俗文化財に指定されており、富士神社がある堤防の坂を、今でも「おふじの坂」と呼んでいます。



円城寺芭蕉踊り

気ままにJOURNEY

の上洛阻止、各藩農兵の魁となつた幕府農兵の徴募、大和五条代官襲撃事件に鑑みての笠松三郷木戸の新設、緊急時の加納出兵など、中でも文久元年（一八六一）の和宮降嫁に際して、岩田郡代より動員を受けた笠松の町衆は、郷足軽として長柄持役、奴として毛槍役に従ったといわれています。



大名行列

行列は、江戸時代の大名行列の先頭部分を構成した、いわゆる「奴の毛槍振り（踊り）」を中心に、家老・お駕籠・お殿など、総勢一八〇人からなる壮大なもの。大羽熊・大鳥毛などの毛槍を、「サー、サーヨーイヤナ、コラ、コラッサーノサ」という威勢のいい掛け声とともに投げ渡しながら町内を練り歩き、八幡・産霊の両神社へ奉賛してきました。この大名行列がどここの大名を模したのかは不明ですが、全国的にも例をみない妙技平成七年には、「笠松の奴行列」が岐阜県の重要無形民俗文化財の指定を受けています。

桜まつりとへそ塚

奴行列と並んで笠松の春を彩るのが、木曾川畔・奈良津堤一帯の桜まつりです。この堤防にソメイヨシノを中心にかつて千本桜と呼ばれていた桜並木が続ぎ、毎年、多くの花見客でにぎわいます。風に踊る桜の花びら、花びらを抱きとめる美しい川面。夜ともなればほんぼりも灯されて、その素晴らしさは、岐阜県下でも有数といわれています。

オグリキャップを生んだ笠松競馬場

昭和五年に設立された笠松競馬場は、岐阜県唯一の競馬場。奈良津堤の一角にあります。この競馬場から、日本の競馬史にその名を残すスターホースが生まれました。競馬ファンならずとも、その名を知るオグリキャップです。昭和六年五月十九日、オグリキャップは二歳でデビュー。初戦は一番人気の予想通り、二位でゴールイン。一戦目には、二着馬へ四馬身の差をつけて初勝利をあげました。以来翌年の一月まで、十二戦十勝二着一回と破

この奈良津堤上には、わが国でも珍しい魂生大明神があります。昔、ある郡代が娘の縁談がないのを心配して、わざわざ奥州（東北地方）から長さ一m余りの男根の形をした大きな石を取り寄せたことから、縁結びの神様として親しまれています。いつの時代もいつの世も、子を持つ親の心は同じもの。娘の良縁を願い、今も訪れる人は後を絶ちません。また、隣にある「へそ塚」は、子の成長を願って、へその緒を預けることで有名です。

竹の成績を残したオグリキャップはいよいよ地方から中央へ転戦。昭和六年、その年の最強馬を決める有馬記念を制覇。平成三年、惜しまれながら引退レースとなった有馬記念で、怪物オグリキャップと天才ジョッキー武豊のコンビは、まさかの奇跡を呼び起こし勝利を手中に収めたのでした。走ることに、競つことに、次々と記録を塗り替え、数々の神話を生み出した伝説のスターホースは、有終の美を見事に飾ったのです。地鳴りのような「オグリコール」とも呼ばれ、引退後、育てられた笠松の地でファンにその雄姿を披露しています。その栄誉をたたえ、平成四年、オグリキャップの銅像が笠松競馬場正門入口左側に建てられました。



地方競馬の星・オグリキャップ

笠松まつり

4月13日：八幡神社・産霊神社笠松まつりは、三郷鎮座の八幡神社と産霊神社の例祭。かつては8月14・15日に行われていましたが、明治になってから、春の祭りに改められて現在に至っています。祭りの呼びものとして、大名行列や山車があります。

笠松川まつり

8月15日：木曾川畔川まつりのメインは花火大会。豪華なスターマインや色とりどりの大輪が咲く打ち上げ花火、それに万灯流しが川面を飾り、一帯は光の幻想劇場と化します。その独特の美しさに魅せられ、毎年、多くの人々が見物にやってきました。



リバーサイドカーニバル

10月中旬：木曾川畔 毎年秋、前夜祭と本イベントの2日間。中でも前夜祭をしめくくるリバーサイドフラッシュは、映像・シンセサイザー・レーザー光線・花火など、その音と光が織りなす世界は、秋の夜の河畔をファンタジックに彩ります。翌日の本イベントは、河原に設置した舞台を中心に楽しいメニューが盛りだくさん。両日とも多くのファンでにぎわっています。



行事についてのお問い合わせは、笠松町役場 TEL058-388-1111



公共交通機関利用
名鉄本線新名古屋駅から笠松駅まで25分
名鉄本線新岐阜駅から笠松駅まで5分
名鉄竹鼻線新羽島駅から笠松駅まで20分
名神高速道路岐阜羽島ICから車で約20分

特集

大正改修

第五編

上流改修の石碑を訪ねて

木曾三川における近代的な治水事業は明治二〇年、三川分流工事に着手したのが最初でした。この抜本的な改修工事を受け継いで、実施されたのが上流改修です。大正から昭和という時代の国土基盤を形成した画期的なもの。流域各地に建てられた石碑は、その成果を如実に物語っています。そこで最終回の今回は、大工事を記念した石碑を訪ね、上流改修を顕彰。次回からは、木曾川下流増補の計画と工事を特集します。



木曾川上流改修の石碑分布図 図内の番号は文中の石碑番号に対応。

木曾川の石碑

北派川越流堤と三斗山島の記念碑
木曾川の改修の中でも、最も規模が大きかった工事は、川島町一帯で、本川とその支川が網流する木曾川の河状の整理でした。大正一三年には、網流する支派川を締め切つて、木曾川を本川及び南派川、北派川の三つの流路に固定する工事が行われました。また、旧主流であった北派川には越流堤（通常の水は流さず高水のみを越流させるための堤防）を築造、洪水分流通を規制し、護岸・水制を施しています。

北派川越流堤は、笠田上流の弥兵衛島から延長八七〇m、天端幅五m、堤防の両法面とも三割勾配、空積土石張の三面張構造で、表裏とも木工沈床の根固工が設置されています。

これらの河身整理により、北派川は高水時以外は水が流れなくなり、木曾川右岸堤に対する危険度は、主流であった時に比べ、大きく緩和されました。

しかしその一方で、大きな犠牲を払つたこと。笠田・松倉間にあった三斗山島は、面積約五、五haの細長い中洲で、三〇戸余りの人家が集落をつくり、百年もの間、生活を営んできましたが、この改修により全島が河床となり、全戸上げて移転の運命を辿ることになりました。



昭和五〇年、川島大橋の橋詰に当時を偲んだ石碑が建立されました。

長良川の石碑

長良川上流記念碑
長良川改修の最重要課題は、その分派川である古川・古々川を締め切り、長良川を一



本化するこでした。

古川・古々川は、現在の長良橋右岸下流約一五〇m地点で分派し、幾度も屈曲し、正木・則武地内を流れて伊自良川に合流していたもので、この地域一帯は、川に囲まれた島と呼ぶにふさわしい地形でした。近島・北島・西島は、それを如実に物語る地名です。昭和一一年に着手された延長約五三八mに及ぶ締切本堤は、昭和十四年に完成しました。改修の大きな成果は、岐阜市北部一帯を水害の脅威から解放、約一六〇haにも及ぶ河川敷を耕地地化したこと。現在は、商店街や文教施設が建ち並び、改修は岐阜市北部の発展の一助となりました。

この改修を記念して、長良橋西の締切堤中央部に長良川上流記念碑が建立されました。碑の頂上にある径二二〇cm、厚六〇cmの御影石は、人柱の古例に代わる鎮石をこの地に沈めたもの模倣型です。

昭和一三年、長良川水害予防組合により、建立されました。
長良古川記念碑
記念碑は、伊自良川左岸一、六kmの締切堤防上に、建てられています。



長良古川は、長良福光において長良川本川より分派し、伊自良川・板屋川を合わせ

て一日市場先で、再び、本川に合流して

ました。上流改修ではその合流点を約一、二km下流に付け替えるものとし、下流部は、延長約二kmの新川を開削。その両岸には新堤を築き、法面には護岸を施して洪水の疎通を図りました。

工事は昭和九年に始まり、昭和二十七年に完成。これを記念して昭和一七年、長良川北水害予防組合により碑が建立されました。この改修に関連した支派川改修として、根尾川の改修が行われました。また、昭和五十一年の災害を契機に、大幅な引堤工事を実施、昔の面影を一新させました。



普濟功の碑
長良川左岸五、一km付近の四屋公園には、普濟功の碑があります。ここは、かつての忠節用水の橋脚跡。長良川改修の付帯工事として実施された用排水事業等の工事を記念して、建立されました。改修前の忠節用水は、岐阜市外二万町村約七四〇ha余の耕地を灌漑してきましたが、長良川の河床低下により取水が困難に。改修を要望する人々の声を反映し、付帯工事として取水口を約二km上流の金華山麓・鏡岩へ移し、従来の灌漑区域を拡大し、岐阜市外九カ町村を包含する二三百haの耕地を潤す一大用水となりました。と同時に、常時の通水も可能となり、岐阜市の衛生・防火や汚濁水の浄化などにも利用されるなど、大きな効果をもたらしています。昭和一五年、かつての樋門取り除き跡に碑は建立されました。また、碑の傍らには治水功労者・山田省三郎の顕彰記念の像、長州薩摩藩土顕彰が建立されており、この地で数多くの改修工事が行われていたことを物語っています。

大縄場の記念燈

長良川左岸四九km付近の川裏公園内に記念燈があります。古来よりこの一帯は、堤外で河川に接する耕地。上流改修ではこの付近より上流、忠節橋付近まで約一、二km区間は、対岸の島田・池の上の引堤により、川幅も広がるので、これとほぼ平行に前面の河川敷掘削とあわせて、築堤・護岸・水制を施工。昭和一四年には竣工しています。



この改修により、約一〇、五haの耕地・住宅・及び県立岐阜高校の学校敷地が誕生しました。記念燈は、昭和一四年、大縄場土地区画整理組合により旧堤の下流端に建立されました。鳥羽川・伊自良川・板屋川の改修工事竣工記念碑。伊自良川に架かる柿ヶ瀬大橋の橋詰に立つ碑は、伊自良川・鳥羽川・板屋川の湛水位低下のための改修工事の成果を記念したものです。

改修による水位低下は、尻毛橋付近で洪水位約一、五m、鳥羽・伊自良川合流点で洪水位約一、四m、河幅の著しく狭小な箇所及び河成りの不成な箇所を除き、改築を行わない方針でした。新堤または、拡張堤防の馬踏は、鳥羽川合流点より下流は五m、上流はいずれも四mとし、堤防高は本川堤防と同じ一七、三mで施工しました。

昭和一六年、長良川北水害予防組合により建立されました。さらに、昭和五一年以降の激特事業の竣工記念碑もすく横に建てられ、その業績を



伝えていきます。

馬踏・堤防の天端、かつて馬が通ったことからこう呼ばれています。

激特事業・激甚災害が発生した地域について、河川改修等を緊急に実施することにより、再度災害の防止や民生の安定等を図る目的で実施される事業。

揖斐川の石碑

揖斐川藤川埋立記念碑
(呂久の新川付替工事)
揖斐川改修の目的は、在来堤の拡張と新川の開削、そして水衝部には護岸・水制を施工することでした。

中でも、岐阜県東南町の呂久付近は、洪水被害が大きかった地域で、川幅も狭く、揖斐川・敷川のいわば喉元にあたり、上流部はしばしば災害をもたらしていたばかりでなく、無堤部より溢した水は遠く杭瀬川へも氾濫しました。

これらの災害を防止するために、大正一三年、上流改修の中でも最も早く工事に着手、延長一、五kmの新川を開削し、両岸には新堤を築造。翌年には、通水することができました。これにより、広大な耕地が生まれ、果樹園や工場、学校敷地などになりました。

地元では、この業績を後世に伝えるため昭和三年、「和宮遺跡」の西方、神明神社境内に記念碑を建立しました。

水門川改修記念碑
大垣輪中の最南端、水門川排水機場の横に、この記念碑があります。



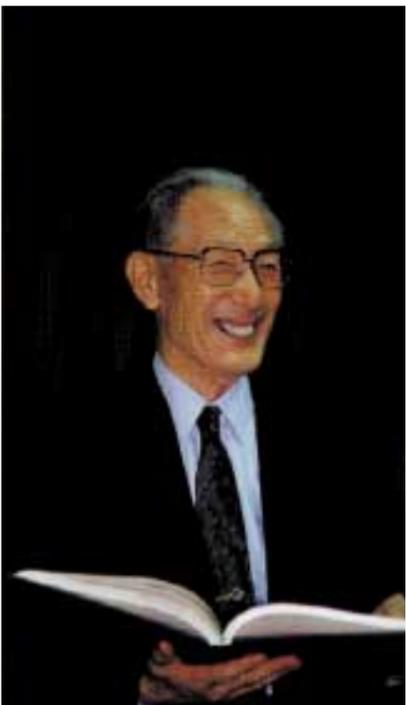
BOOK LAND

ふるさと笠松

編集 ふるさと笠松編集委員会
発行 笠松町

本書は想を練り稿を起し、三年の歳月を要して出版されたもの。笠松の歴史の軌跡の進展を、その時代に生きる人々の姿と重ねあわせて、鮮明に浮かび上がらせている。中でも、「笠松の風土」、「原始社会の考古資料」、「江戸時代における人々の生活」、「明治維新における社会の変貌」、大正から昭和、戦後の復興などは、読みこたえ充分。平明な文章に加え、写真や図版をふんだんに取り込み、親しみやすい編集を心がけている。

木曾川上流改修を省みる



安藤 萬壽男先生

略歴
愛知大学名誉教授・前愛知産業大学総長・経済学博士
『輪中 その形成と推進』など輪中に関する著書、論文多数。

はじめに

明治二〇年から同四四年にわたって施行された木曾川下流改修（明治改修）工事は木曾三川流域の治水を画期的に改善する大工事であったが、その工事実施区域は木曾三川の下流域に止まっていた。このため、早くから、下流改修工事に続いてその上流部の改修が地元などから要望されていた。しかし、国の財政上の制約などからそれがあぐれ、漸く大正一〇年から実施されることとなった。この上流改修工事は国の政治・財政事情等が影響して当初の計画の一〇年継続事業では完成せず、第二次世界大戦後の昭和二五年に完成している。しかし、上流改修が大正一〇年に着手されたので、下流改修を「明治改修」と呼ぶのに対し、「大正改修」とも言われている。

本誌ではこの上流改修をすでに一八一―一の各号において、木曾三川の個々の工事に別の特輯してきた。本号においては、それらの既述をふまえつつ、上流改修の全体を総括するべく体系的とする。

上流改修工前の工事地域のすがた

上流改修工事が実施された区域は地形的にみると、濃尾平野のうちの自然堤防・後背湿地帯と扇状地にはほぼ該当するといえる。そして、工事地域は工事施行前には近世末以来の姿をほぼもっていたと概言できる。

まず、当時の河川の状態をみよう。木曾三川には本川・支派川とも大きく曲流している箇所がみられ、それが洪水の流下をおくらせ、破堤の因ともなった。そして洪水から守る堤防は、堅固な粘土でその中核部を固めていた堤防が多かったが、今日からみると、その高さ、堤防敷とも著しく矮小であった。しかも扇状地から自然堤防地帯に遷移する処などには遊水地を設けていて、そこが無堤の部分であり、また扇状地上では露堤であった連続堤ではなかった処が揖斐川の本支流などになり多くみられた。また、河川敷も今日に比べると概して狭溢であった。

堤内をみると、扇状地の扇端部分より以下の低地では水田が卓越しているが、この

水田は後背低湿地を中心に湿田で占められ、ここで二毛作をするには労力のいる高畦作りをせねばならなかった。冬季には湿田中の動植物を求めて、雁・鴨などが舞下りる風景がみられた。また、この地に数多く形成されていた大小区々の輪中では、排水機の設置の不十分さや排水能力の劣弱さのため、輪端部を中心に悪水停滞に苦しみ、水田の土地生産性が低かった。この生産性を少しでも上げるように、後背低湿地を中心に、近世中期以降、堀田が造成されてきたが、この造成地は次々と拡大され、上流改修着手当時は堀田が最も広く、かつ濃い密度で分布していた時代といえよう（図一および写真参照）。

上流改修工事による治水効果

上流改修工事では治水の基本である河道の整備が抜本的に実施された。その工事の中で特に注目されるのは、木曾川での三派川地区整備（岐阜県川島町）、長良川での古川・古々川締切（岐阜市内）、揖斐川の呂久地先（岐阜県東南町）での新川付替、などである。そして、改修工事ではそれまで無堤ないし露堤であった部分に新規な連続堤を築造しただけでなく、木曾三川の全ての本川・支派川を通じて、従前は比較にならない高大な堤防が築かれた。これに加えて、木曾・揖斐両川ではその上流の山地内いくつものダムができて、その上流からの土砂の供給・堆積がなくなったことが改修の効果にプラスしている（もちろん、これは木曾三川の全部の本流・支派川に共通しているわけではない）。

図1 土地改良前の大垣市築捨町2丁目の一部（地籍図より）



図2 土地改良後の大垣市築捨町2丁目の一部



道路交通体系の整備と発達

上流改修前にはこの地域の道路などが貧弱であったことは既に一言したが、このことが地域の経済発展の障害でもあった。大正時代の後半から昭和初期にかけては日本のトラック、バスの普及・発展の時代であったが、そのためには道路の改善が肝要であった。上流改修によって、それまで大小の輪中を守ってきた堤防の多くがその役割を終った。このため、その堤防の馬路を切り下げたり、堤体の大部分を取り去ったりし、その土は低い水田や堀田に運ばれ、旧堤跡はトラックなどが十分通行可能な道路となった。

一方、上流改修地域内の乾田化も幸して、これまで低湿地域に開設されなかった近代化的な道路が逐次建設されてくる。その代表的事例が昭和初年に完成した岐阜と大垣を結ぶ岐垣線（旧国道二一号线）であり、この道路に架設された長良・揖斐両川の鉄橋がこの地域の道路用の近代的鉄橋の最初である。

都市化の進展

上流改修による治水の著しい進歩と土地改良・道路網の充実によってこの上流改修区域内の都市化が、国民経済の発展に関連しつつ、著しく進展してくる。都市化の地域的展開をみると、ほぼ既存の岐阜・大垣などの都市を核としつつ、その周辺に面的に拡大しているが、その基礎には土地改良・道路整備の成果があるといえる。そうした中で、廃川地跡に工場や学校が進出したり（例、旧糸貫川）、木曾川の川中島であった三派川地区（川島町）への工場進出などが

かくて、上流改修工事実施区域から下流では洪水や破堤の被害が従前に比較すると著減したといえる。



干拓事業前の大垣輪中南部低湿地の堀田風景（大垣市築捨町南部、現国道258付近の位置より西を望む）昭和31年 河合 孝氏撮影による



現在の築捨町の景観

みられる。また、岐阜市内では古川・古々川が締切られると、旧河川敷地に運動場、学校などの公共施設が設けられた他は一面に岐阜市郊外の住宅地となり、古川締切以前の景観は全くみられなくなった。

木曾川上流改修地域の治水の今後

これまで述べてきたように、上流改修は木曾川上流部における治水に画期的な成果をもたらした。それは高く評価されねばならないが、それだけではなく、それが基礎となつて、この地域の社会的経済的発展が著しく、今日では改修前の様相を全く想像しえないような景観を呈している。

しかし、この地域の治水が今後、絶対に安全であるとは必ずしもいえない。それは第一に、この上流地域における計画高水流量を上回る流量が今後、出現しないとは誰も保証しえないからである。第二に、河川をめぐる環境が人間の側の事情で大きく変つてくることである。河川の整備が進むと洪水が流下する時間の推移が変化し、短時間で出水のピークが訪れやすくなり、また堤内における都市化が進むと、たとえ降水量は従前と同一であっても、従前のように田畑が一次的に降水量を吸収してくれる余裕が乏しくなり、一気に悪水となって低所に集中するようになるからでもある。

かくて、われわれは常に河川をめぐる環境の変化を注意深く見守りながら、より安全な、そしてより恵み多き河川を創造していく必要がある。

参考文献

- 岐阜県土地改良史編集委員会「岐阜県土地改良史」
- 岐阜県 昭和五八年三月 安藤萬壽男
- 「輪中 その形成と推移」 大正堂 昭和六三年二月
- 建設省中部地方建設局「木曾三川治水百年のあゆみ」 平成七年三月

上述のように、上流改修は地域発展の基礎を固めたものであるから、これらを通じて農水省などの中央官庁や県・市町村の施策が展開し、改修工事の効果が実現してくる。特に農業についてはそのとおりである。

上流改修で堤内の悪水が排水機の充実と相まって十分排水できるようになると、これまで地域内の低湿地に広く分布していた堀田の掘潰地はその役割が終る。そして第二次世界大戦後の深刻な食糧不足と相まって、この掘潰地や池沼が県営補助干拓事業の対象となり埋め立てられた。この場合、

農業発展への貢献

常な集中豪雨時以外は悪水停滞の被害は解消してきた。このように、木曾川上流改修工事はこの地域の社会・経済発展の基礎を整備したものと位置づけられることができる。以下においては、その効果を項目別に述べる。

埋め立て用の土砂は上流改修後の木曾三川本支流の河川敷地内からサンドポンプによって供給されてもいる。例えば、大垣輪中ではこの事業によって昭和三年から同四年にかけて、計一六三ヘクタール余の農地造成ができ、これと並行して実施された県営の水場整備事業で埋め立て地を含めた水田の水場の単位が大きくなって整備され、それまでの堀田景観は全く消滅した。かくて、全面的に二毛作が可能となり、水田の土地・労働の両生産性が著しく向上した（図一および写真参照）。

一方、上流改修の結果、各所の廃川地に新しく耕地が造成されたが、これらの耕地は河川の跡地であるため砂質の土壌からなり排水もよく、水田が卓越する地域の中では数少ない畑地として活用されている。例えば既述の揖斐川右岸の呂久地先の旧河川地跡ならびにそれに続く旧遊水地では一面に野菜栽培や施設園芸が見事に展開している。

民話の小箱

猿尾のつつみ

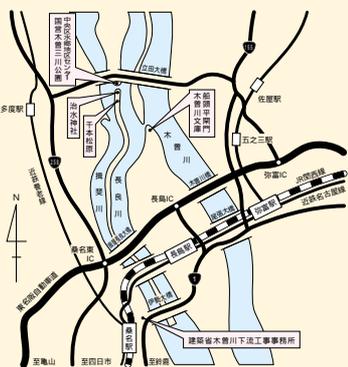
笠松町

むかし、むかしのこと。
源太は、おつとおつとおつと幸せに暮らしていた。
源太の家は、美濃国の木曾川堤防沿いの集落・笠町。
小さい頃から、川は源太の遊び場だった。
ところが、ある晩のこと。恐ろしい大水が村を襲った。
このままでは、家が流されてしまう。
そう、決意したおつとおつは、源太とおつをあを連れ、舟に乗って逃げ出した。
しかし暴れ狂う川は、あつという間に舟を呑み込んでしまい、源太は必死で水の中を抜け出てきたが、おつとおつがおつかあはそれつきり帰ってこなかった。
源太の家があったあたりは、渦を巻いて流れ、川底になってしまった。この洪水の後、木曾川の対岸である尾張藩には、「お困堤」と呼ばれる頑丈な堤防が造られた。
しかし、美濃国にはそれより高い堤防を造ることは許されぬ。
「大雨で堤防が切れたりしないか」
つつみ切れば源太をはじめ、村人たちの悩みの種だった。
そんな時のことである。
岡田将監善政が、美濃国の代官として、源太の住む村に赴任した。
「今度の代官様は、前に可児郡に住んでござったが、そのときにも、えろつ大水のことを心配して下さったげな」
だが、代官様とて、大水はどつすることできない。
意を決した源太は、代官様のところへお願いに行った。
「川に猿のしっぽのようにつつみを突き出せば、水の勢いを弱めることができます。ぜひとも、このつつみの許可をください」
前々から、揖斐川などの堤防を見て回っていた源太は、丈夫な堤防とは、猿尾のつつみしかないと考えていたのである。
「ほつ、猿のしっぽのところに水があたつて、流れをやわらげるんじやな。それはいい考えじゃ。材料やお金もきょうさんかかるけど、わしが手配しよう」
源太の考えを聞き入れた代官様は、次の日からさつそく仕事にとりかかり、代官様みずから、工事を指揮した。
もつちよつとで工事が完成するといつ日。
一日も続いた大雨で川は、また大水となった。
新しくつった猿のしっぽのように突き出たつつみに水があたり、白い水けむりをあげた。
「猿尾のつつみをたのむぞ」
源太も村人も代官様も、みんなが神に折つた。
そして、猿尾は立派に川の流れを防いだ。

この猿尾のつつみは、今も笠松町の川岸に、その頃の様子をしのばせている。そして、「将監猿尾」と呼ばれている。



木曾川文庫利用案内



《開館時間》午前9時～午後4時30分
《休館日》毎週月曜日・祝祭日・年末年始
《入館料》無料
《交通機関》国道1号線尾張大橋から車で約10分
名神羽島I.Cから車で約30分
東名阪長島I.Cから車で約10分

《お問い合わせ》
船頭平開門管理所・
木曾川文庫
〒496 愛知県海部郡
立田村福原
TEL(0567)24-6233



編集後記

花の季節です。木曾川文庫が位置する船頭平河川公園は、桜の名所です。河川公園では、立田村商工会と財河川環境管理財団の共催で、3月29日(土)～4月6日(日)の間、「第11回船頭平開門桜まつり」が開かれます。400本余の桜が美しさを競う春。また、これからの季節、「桜」から「サツキ・ツツジ」そして「新緑」へと続きます。皆様お誘い合わせの上、ぜひお出かけください。

Vol.22の編集にあたっては、笠松町と安藤萬壽男先生にご協力をいただきました。ありがとうございます。

編集部では皆様のご意見、ご感想をお待ちしています。宛て先は木曾川文庫まで。

今回は岐阜県高鷲村を特集します。歴史ドキュメントでは木曾川下流増補の計画と工事をご紹介します。ご期待ください。

[お詫び] Vol.21 1頁3段目29行目
受け入れませんでした。受け入れました。
ここに訂正させていただきます。

表紙写真
上:猿尾 中央:川灯台 下:結びの神様・魂生大明神とへそ塚